

知之為知之，不知為不知

之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らざると為す(為政第二)

桜美林大学名誉教授 植田渥雄



ある時、孔子は子路を呼び寄せ、次のように諭しました。「由！悔女知之乎。知之為知之，不知為不知，是知也（Yóu！Huì rǔ zhī zhī hū？ Zhī zhī wéi zhī zhī， bù zhī wéi bù zhī， shì zhī yě）」（由よ、女に之を知るを誨えんか。之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らざると為す。是れ知るなり）〈為政第二〉。「由（子路）よ。今日はお前に『知る』ということの意味を教えてやろう。それはな、知っていることは知っているとして自覚し、知らないことは知らないとして自覚すること。これが『知』るということなんだよ」と。何でもかんでも知ったつもりでいると、知識はそれ以上進みません。知りたいという欲望も湧いてきません。孔子が子路に伝えたかったことは、「知」は「未知」を自覚することから生まれる、ということでしょうか。

これまで何度も出てきましたが、子路は勇気と決断力で後世に名を残しています。魯の国の権力者季康子が、子路を政治家として使えるかどうかと孔子に訊ねた時、孔子は次のように答えています。「由也果。於从政乎，何有！（Yóu yě guǒ。 Yú cóng zhèng hū， hé yǒu！）」（由や果なり。政に従うに於いてや、何か有らん）〈雍也第六〉。子路は決断力があるから、政治をやらせても何ら問題ない、と。このことから、政治には決断力が必要という、この一点で、孔子が子路を高く評価していたことがわかります。一方、孔子にとって気掛かりなことは、子路が己の勇におぼれて、生命を軽んじることでした。常に勇み肌の子路に対して、孔子は「あんなことではまともな死にはできないだろう」と危惧していました。案の定、子路は自ら仕官していた衛国の内乱に巻き込まれて非業

の最期を遂げることとなります。

さらにもう一つ、それは、子路が傲慢で人の言うことに謙虚に耳を傾けることをしない点でした。ましてや子路は孔子の弟子の中では最年長です。後輩たちの前で大言壮語したり、独断専行したりすることがあっても、孔子を除けば、これに忠告を与える人は極めてまれであったようです。子路はまた書物から地道に学ぶことも苦手でした。

こんなこともありました。子路は魯の季康子に仕えていた頃、年若い後輩の子羔を費という地域の宰（長官）に抜擢しました。まだ学問の経験も浅い子羔にとって、この職は重荷ではないかと心配した孔子は「未熟な青年をそんな重い地位につけたら折角の人材を却って駄目にしてしまうのではないかと忠告しました。これに対して子路はこう反論しました。「人民がいて国家があります。これを治めるにはまず書物を読んでから、というわけのものではないでしょう」と。学問は実践を伴わないと意味がないというのは孔子の持論でもありました。だからそのことを逆手に取り、生半可な知識を振りかざして恩師に盾ついたのでしょう。しかし他の弟子からならともかく、子路の口からその言葉をきくことに孔子はいささか困惑したようです。それは、書物を通じて先人の残した叡知から真摯に学ぶという向学心、その向学心の欠如を感じ取ったからでしょう。やっぱりそうか、お前は……。そこで孔子はつぶやきました。「だから私はそういう減らず口を叩く輩が嫌いなんだよ」と。

それでも孔子は、子路の飾り気のない一途な心を愛してやみませんでした。

（わりい「中国語で読む漢詩の会」講師）